

月刊

2016

2
月号

みんぱく

特集

夷酋列像

を

読み解く



「インタビュー」 「夷酋列像」の謎を追う 大塚和義 【聞き手】 佐々木史郎 日高真吾

「夷酋列像」への多角的視点からのアプローチ 右代啓視

「夷酋列像」デジタルコンテンツの制作 内田順子 | アイヌの衣服から見えてきたこと 吉本忍

蓄えない社会

エチオピア南部に平等な社会があると聞いて、行ってみた。京都文教大学教授の松田凡さんまつだ ぼんの二年以上にわたるフィールドで、彼がコエグという民族のところに行く時に同行を許してくれたのだ。

オモ川の下流域にイネ科の穀物ソルガムを栽培しながら暮らしている。かつてのナイル川下流域と同じように、雨季の洪水が上流から肥沃な土壌を運んでくれ、乾季の川原に種を蒔くと肥料なしで雨季の始まる前に収穫できる。

ところがどんなに頑張っても半年分しかできない。その不足分を補うために乾季に魚を捕る。乾季は池や沼の水が乾燥で水が少なくなり、手づかみで魚が獲れる場合もあるのだ。さらに小動物を狩り、ハチミツを取って雨季前のソルガムの収穫まで生き延びる。

天候不順などなければいいのだが、モノをため込むことのない彼らは不安はないのだろうか。私たちはモノをため込むことよって将来の災厄や老後に備える。モノをため始めるとどこまでため込めばいいのか、際限がなくなる。

彼らも何かあった時の安全保障を考えてないわけではない。他の人あるいは家族とのつながりを大事にしている。

私が二度目にこの村を訪れた時、初めて行った

関野吉晴

プロフィール
1949年東京都生まれ。武蔵野美術大学教授。一橋大学在学中に同大探検部を創設。横浜市立大学医学部を卒業し、医師となる。1993年から10年をかけて、人類拡散の足跡を踏破する「グレートジャーニー」を敢行。2004年から、人びとが海を渡りどのように日本へ到達したかをたどる「新グレートジャーニー」日本列島にやって来た人々」を始め、2011年に終。1999年に樺村區 日冒険賞、2000年に旅の文化賞。

時に仲良くなったマガヤという男がヒョウタンにのみなみとハチミツを入れて持ってきてくれた。ハチミツは彼らにとって森の精霊の贈り物と言われるほど貴重なものだ。私は何をお返しに渡したらいいのかと思ひ、松田凡さんに尋ねた。

「お返しに何をあげたらいいですかね」

すると、彼らの習慣をよく知る松田さんは言う。「いや、放っておいていいですよ。マガヤもお礼を貰うつもりはないですから」

日本人的感覚だとお礼をしたいのだが、次第に分かってきた。

マガヤは私とベルモという関係を作りたかったのだ。擬制の親族関係を結ぶようなもので、「今は何もいらないけど、何かあったらお互い助け合おうぜ」という関係だ。マガヤはこの村にもベルモが三人いる。また牛飼いの他民族にもベルモがいる。その他彼らは数年に一度通過儀礼がある。若者たちはその儀礼の前に家族から離れ若者宿で過ごす。そのため成人になってから、同じ年に通過儀礼を受けたものどうしは肉親と同じように緊密な関係になる。

このようにものをつため込まないかわりに、他の人たちの繋がりを強くすることによって、老後を含めて将来の不安に対する安全保障としているのだ。

月刊 みんなぱく

2月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
蓄えない社会
関野 吉晴</p> <p>特集 「夷酋列像」を読み解く</p> <p>2 インタビュー 「夷酋列像」の謎を追う
大塚 和義 【聞き手】佐々木 史郎 日高 真吾</p> <p>7 「夷酋列像」への多角的視点からのアプローチ
右代 啓視</p> <p>8 「夷酋列像」デジタルコンテンツの制作
内田 順子</p> <p>9 アイヌの衣服から見えてきたこと
吉本 忍</p> <p>10 集めてみました世界の〇〇
あかり編
丸川 雄三</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 味の根っこ
ピゴス
マジエツツ アグネシカ</p> <p>16 文化遺産おもてうら
見出された多様な価値
——ミクロネシアにおける世界遺産申請の過程から
河野 正治</p> <p>18 音の居場所
フィリピンの街で奏でる山村の音楽
——トラヤン・マジョカヨン・アンサンプル
米野 みちよ</p> <p>20 人間学のキーワード
優生学
松尾 瑞穂</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|

「夷酋列像」を

読み解く



二〇一六年二月二十五日(木)から開幕する特別展「夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―」。「夷酋列像」とは、一七八九年の「クナシリ・メナシの戦い」に加わったアイヌたちに戦いをやめるよう説得した二名の有力者を描いた絵である。この特集では、「夷酋列像」のもつ歴史的意義や「夷酋列像」に描かれたものからみえる交易者としてのアイヌの人びとの姿についてせまるとともに、本特展の内容及び「夷酋列像」をより理解するために開発したコンテンツについて紹介したい。

特別展

「夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―」

会場 国立民族学博物館 特別展示館

会期 2016年2月25日(木)―5月10日(火)

シヨニコ
蠣崎波響筆「夷酋列像」、1790(寛政2)年、
フランス・ブザンソン美術考古博物館所蔵

インタビュー

「夷酋列像」の謎を追う

話し手



大塚 和義
民博名誉教授

聞き手



日高 真吾
民博文化資源研究センター

「夷酋列像」の謎が残り、「夷酋列像」の人びとを惹きつけてやまない。その魅力と謎について、アイヌ文化研究の第一人者である大塚和義名誉教授にお話を伺った。



民博所蔵の「夷酋列像」に描かれたイコトイ。
民博の写本は上下2巻にわかれ、それぞれ12人の図像と松平定信自筆とみられる詞書が記載されている

真筆と写本

佐々木 民博にも題簽に「夷酋列像図」として書かれた「夷酋列像」の写本(以下、民博本)が所蔵され、特別展でも展示されます。その収集の経緯についてお願いします。

大塚 二〇〇三年、東京神保町の古書肆、一誠堂書店から創業一〇〇周年を記念して、展示即売会の目録が出ました。藤原定家の日記など、貴重な古書籍二〇〇点のなかに、民博本があったのです。二人の図がすべてそろっており、各人物の解説として、蠣崎波響の叔父にあたる松前広長がした「夷酋列像附録」が画像に沿って書写されていたのです。しかもそれは松平定信の筆跡であるというのです。これはぜひ民博に入れなければならぬと思いました。でも当時、民博は美術品は収集しないことになっていましたので、館内でも反対の声がありました。

日高 僕はちょうどそのとき資料収集の担当でしたから、よく覚えていました。

大塚 これは美術品ではなくて、二〇〇年前のアイヌ研究のための民族誌資料として優れた価値があり、歴史的、文化人類学的研究にとって非常に重要な情報が込められているということを各方面に説明して、一年ほどかかってようやく収蔵が決められました。民博所蔵となつてから、その存在が目ざされ、利用が多くなっています。

佐々木 特別展では写本だけでなく、ブザンソン美術考古博物館所蔵の蠣崎波響真筆も展示されます。この真筆本がフランスに渡った経緯はどうお考えでしょう。

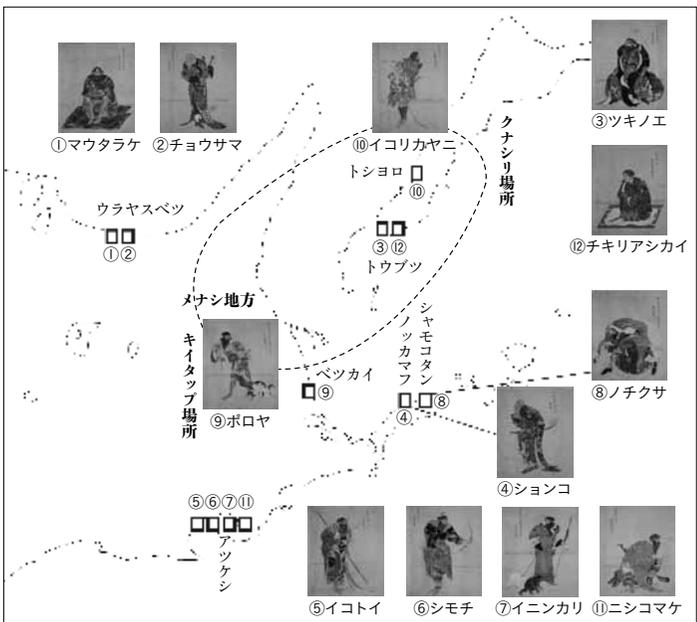
大塚 日本からの流出は、幕末に来日したメルメ・カシオン神父による説がありました。わたしは

次の二人のどちらかではないかと考えています。まず、幕府軍を指導していたフランスの軍事顧問団のジュール・ブリユネです。戊辰戦争(一八六八―一八九)で幕府軍が敗れ江戸城が開城した後、幕府海軍副総裁だった榎本武揚は蝦夷地へ逃れ、箱館の五稜郭にたてこもります。フランスの軍人たちは榎本武揚に協力していたのですが、新政府軍による侵攻で陥落する前に、船で箱館を脱出します。そのとき、ブリユネは「大君の太刀」をフランスにもち帰っているのです。「大君」とは徳川最後の将軍・徳川慶喜のことです。ブリユネは、絵を描くことがうまく、多くのスケッチ画を残しています。美術に関心の強いブリユネが「夷酋列像」に出会い、所持者に所望した可能性を感じます。じつはブリユネはブザンソンにも近い、アルザス地方南部の出身なのです。あの辺の人びとは勇敢な人が多く、海外へ出て宣教師になりました。

日高 向こう見ずな人が多いといわれる地域ですね。

大塚 そうです。ブリユネがもち帰ったと考えると、榎本武揚が箱館を制圧するころまでは、松前藩側にあつたのではないかと思います。

もうひとつは、時代は少しずれますが、映画を発明したリュミエール兄弟にかかわるものです。彼らは奇しくもブザンソンの出身なんです。彼らのシネマトグラフの日本での興行権を取得したのは、実業家の稲畑勝太郎です。リュミエール兄弟とは、リヨンの工科大学への留学時代に交流があつたのです。興業に加え、日本で撮影するため、リュミエール兄弟社の技師コンスタン・ジェルが来日します。ジェルは北海道にも赴き、アイ



「夷酋列像」に描かれた12人の有力者の順と拠点の図。破線の内部は、クナシリ・メナシの戦いが起こった場所。12人の拠点の大半が、戦いの起こった場所を取り囲むように位置しているのがわかる。©大塚和義

ヌの人びとを撮影しています。アイヌ風俗の映像の最初のもので。それが一八九七年のことです。そのときに「夷酋列像」がジレルの手に渡ったのではないかと考えています。

わたしは、民博本の収蔵を契機として、二〇〇五年度に民博で共同研究会「『夷酋列像』の文化人類学的研究」を立ち上げました。それまで、大半の「夷酋列像」研究は、美術史的な観点でおこなわれていました。歴史研究者も、画像を読み解くことには関心を示さなかったのです。そこでこの共同研究では、文化人類学を基礎において、美術史や歴史学にとどまらず、東洋史、物

流経済史など関連諸科学による「夷酋列像」の総合的研究を目指しました。描かれている毛皮の分析については動物の専門家に、中国絵画からの影響も少なからずあるのではないかとということで中国絵画の専門家にお話したくというように、今までになかった議論をいろいろとすることができました。

その共同研究の過程で、佐々木史郎さんから提案をいただき、民博が属する人間文化研究機構による連携研究「アイヌ文化の図像表象に関する比較研究」とジョイントすることになりました。おかげでブザンソン美術考古博物館に行つて真筆本の解析をするなど、フランスでのフィールドワークや、北海道での公開講演会やシンポジウム開催ができました。

現在、その成果報告をまとめています。基礎資料集をまず出して、その次に参加者各自の研究成果をまとめた論文集を出す予定です。この共同研究によって、メンバー全員の探究心がより高まったのではないかと思います。今後どういう形で花開くのか楽しみです。人文系の学問は成果が出るのに熟成期間が必要ですから。

なぜ描いたか

佐々木「夷酋列像」は、一七八九（寛政元）年のクナシリ・メナシの戦いのあと、松前藩主の松前道広の命で、蠣崎波響によって描かれました。「夷酋列像」はなぜ描かれたのか。そしてそこからどのようなことが読み取れるのでしょうか。

かが総合プロデューサーのような役割をしていたのかもしれない。その背景がしるされているはずの藩日記は、松前藩が国替になったときに数日間かけて焼いてしまったといわれています。徹底した隠ぺい工作をしているわけです。

深まる謎

佐々木 二人のうち、波響は実際に何人と会ったと思われませんか。
大塚 蜂起の鎮圧後、和人に協力したアイヌは道南の松前に「歓待」というかたちで連れてこられます。そのなかには「夷酋列像」に描かれた五人もいました。だから、彼らにはもちろん会っているでしょう。残りの七人にも、あとで会ったという説もあるのですが、全員とは思えません。当時、松前の城下町にもたくさんアイヌの人がいましたから、彼らをスケッチして当てはめたということだってありえます。

共同研究会では、「夷酋列像」の「絵解き」に挑みました。二人が身にまとい、いる蝦夷錦やロシア製の外套、座っている朝鮮毛綴の敷物など、描かれたあらゆるものを分解して、何が読み取れるのかといったことを細かく検討しています。波響の絵は、はじめから「野蛮」に描かなければいけないという感じもするし、虚実取り混ぜて、ありえないかたちとして描いてやろうという意図も感じます。服装や、文様など部分だけ見たらリアリティに富んでいるのですが……。

佐々木 部分的には忠実だけど、全体的にはそうではないということですね。



1799（寛政11）年成立の『蝦夷國管見記』に描かれた戸勝（十勝）郡惣乙名のクシユバクノゾ。和服を着てあぐらをかく姿は、「夷酋列像」に描かれた人びととの服装とは対照的である。戸勝惣乙名とは戸勝地域の集落を代表する長（おさ）を指す。個人蔵

大塚 これまで二〇年近くも「夷酋列像」にかわり、共同研究もおこないましたが、何のために描かれたのか、実際、謎は深まるばかりです。

描かれた二人が中国やロシア製の衣服や装身具や器物で飾り立てた画像は、和人とは異なる人びと、異人であることを強調しているかのようです。そのように描くことで、中国やロシアと手を結んだ支配のおよばない「化外の民」を鎮圧したのだと、だから自分たちの統治能力に落ち度があったわけではないのだと申し開きをしたかった、というのが画像成立の理由のひとつではないかと思えます。あるいは、クナシリ・メナシの戦い、すなわちアイヌの蜂起が起こってしまったことによる国替を阻止したかったのではないかと。結局、松前藩は、戦いが起こった一八〇七（文化四）年に福島県梁川に国替されますので阻止はできなかったのですが。

佐々木 波響は「夷酋列像」を完成させて、京都にもって行きます。そして京都画壇の交流のなかで、「夷酋列像」は光格天皇の天覧を仰ぐことになりま。

大塚 なぜ「画像」を、まずは江戸ではなく京

大塚 全体としてはちぐはぐですね。でも見ていてそういう非現実的なおもしろさがあります。

佐々木 構図にしても、なぜあんなポーズをしているのか不思議です。

大塚 中国の絵画の構図を下敷きしているようです。服装だけではありません。イニンカリが連れている子熊の頭は、シロクマのように見えます。しかし研究会では、ホッキョクグマ説や、アルビノのヒグマ説は否定されました。国後島の閉鎖的な環境のなかで、白い毛皮をもつ血統を受け継いでいるヒグマという説が有力で、その後、国後島での動物生態学調査がおこなわれています。日高 特別展では、「国後のシロクマ」といわれているクマの写真、パネルが展示されるのですが、見るかぎりアルビノっぽくはないですね。銀ギツネのような、シルバードバックのような感じのクマだと思いました。



イニンカリ 蠣崎波響筆「夷酋列像」、1790（寛政2）年、フランス・ブザンソン美術考古博物館所蔵

佐々木 結果としては、波響は京都の画壇に受け入れられて、のちに花鳥風月画の画家としてそれなりに認められます。ただ政治的な効果はちよつと疑問かなと。もう少し突っ込んで考えると、京都にもって行つたからこそ幕府は無視した。絵画を見せに行つただけの、純粋な文化交流ということにしようか。

大塚 「夷酋列像」を描き、京都にまでもって行くアイデアを出したのは、藩主の道広なのか、波響自身なのか。あるいは家臣団から出たのか。そして二人を選び、描き方を誰が決めたのか。誰

実像と虚像

大塚 松前広長による序文や解説と、描かれた絵との整合性もちがはぐです。序文には、「夷酋列像」が描かれる経緯が書かれていますが、アイヌの人びとは「野蛮」で「未開」なる人びとのような位置づけです。服装の豪華さとその背景にある交易経済が盛んだったアイヌの実情とはまったく合いません。

佐々木 広長の序文は「野蛮人」と書かなければならないというか、こういうものを作るときの様式があつて、それにあてはめようとして実像と大きな矛盾を起こしているのかなという気がしました。

大塚 アイヌは「野蛮」でも「未開」でもありません。誇り高きトレーダーとして、中国やロシアとの交易で非常に活躍していました。

佐々木 特に、クナシリ・メナシの戦いが起きた道東地方に暮らす人たちは、アイヌのなかでも最後まで自立性を保った人びとでしたね。

大塚 そうです。彼らは千島列島まで出かけて

狐をおこなっていました。北方四島のとなりウツプ島は「ラッコ島」ともよばれるほどラッコ猟がさかんなところですよ。道東地域のアイヌはそこで狩猟・生産を占有していました。ラッコなど海獣の毛皮や、ワシ・タカなど猛禽類の矢羽根など、豊かな交易資源と流通の拠点があり、非常に地の利を得ていたのです。

そういう意味では、アイヌ社会にも非常に豊かな時代があつたと思います。軍事力だつて、道南の和人に匹敵するものをもっていました。実際に樺太アイヌが元との戦いに用いた弓などが残っています。

「夷酋列像」への多角的視点からのアプローチ

右代啓視 北海道博物館学芸主幹

一九八四（昭和五九）年、フランスのブザンソン美術考古博物館（以下、ブザンソン博）の所蔵品に、一七九〇（寛政二）年に描かれた蠣崎波響筆の「夷酋列像」二点と松前広長が著した「夷酋列像序」二点が発見されたという報道記事は衝撃的であった。これまで波響筆とされていた「夷酋列像」は、函館市中央図書館所蔵の「御味方蝦夷之図」二点であり完全なものではなかった。しかしながら、幸いに小島雪晴が一八四三（天保一四）年に模写した「夷酋列像序」二点、「夷酋列像」二点、この模写に付けられた「末文」二点からなる作品があり、全容を伝える貴重な資料として知られるだけであつた。

本来の「夷酋列像」は、波響が描いた二枚のアイヌの絵と、家老を務めた松前広長が著した二枚の「序文」からなるものである。描かれた二枚のアイヌは、一七八九（寛政元）年五月に起きた「クナシリ・メナシの戦い」を治めるため、松前藩に協力した有力者とされている。さらに、つけられた解説として、広長が著した「夷酋列像附録」があり、松前藩が「夷酋列像」を制作した意図を知ることができる。このことから「夷酋列像」は、アイヌ絵としての美術的な価値と歴史的な価値を兼ね備えた一級資料でもある。松前藩主である松前道広の君命を受け、波響はアイヌの人びとの異質性を示すため、あえて中国の衣装や西洋の外套などを身につけさせて描いている。

特別展の目的は、この「夷酋列像」に焦点をあて、模写や粉



チキリアシカイ 蠣崎波響筆「夷酋列像」、1790（寛政2）年、フランス・ブザンソン美術考古博物館所蔵

クナシリ・メナシの戦いは、幕府や松前藩によって、暮らす土地だけでなく、その自立性が奪われゆくなかで起こった、アイヌという民族の危機に対する、最後の大規模な抵抗だったのかもしれない。

波響も矛盾には苦しんだのではないのでしょうか。波響は一年以上をかけて、一二枚の絵を描きます。なぜこれほどの時間と労力をかけて、精密な描写をしたのでしょうか。

絵を見ていると、波響はどういう気持ちで描いたのか、いろいろと伝わってくる気がします。ツキノエの妻チキリアシカイは、自分の息子が処刑されただけでなく、その首実検までさせられます。その顔は、悲しみなのか、怒りなのか、あるいは憤懣やるかたないというような表情にも見えます。そのときの波響の心情とは一体どのようなものだったのだろうかと思えます。決して「化外



シンポジウム「夷酋列像は何をうつすか」（2015年10月11日開催）



北海道博物館での展示会場風景

本などを一堂に集めることで、これまで知られている歴史的背景や波響、日本近世絵画史はもとより、そこに描かれている衣装や道具からアイヌ文化、北方域の物流の実態、大航海時代という世界的な動きなど、知られざる北東アジアや北太平洋地域の状況をよみとることにあります。さらに、歴史、民族、美術など多角的な視点でとらえることで、一八〜一九世紀の多様化する社会構造、本州以南の人びとが蝦夷地や外国に対するイメージを、現存する資料でリアルに展示することができると。また、国立民族学博物館（以下、民博）と国立歴史民俗博物館（以下、歴博）、北海道博物館のメンバーが共同で実施する博物館ならではの学際的な特別展示でもある。

この特別展「夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―」の企画は、三年前の二〇一三年から民博と歴博と北海道博物館の担当者レベルで幾度となく協議をしながら展示プロジェクトが立ち上げられた。この間、北海道博物館での実行委員会での立ち上げ（北海道新聞社、北海道歴史文化財団、北海道博物館）、借用交渉、協定書、借用条件などと、ブザンソン博や民博、歴博などとの調整をはかりながら準備を進めてきた。最初の開催である北海道博物館では、二〇一五年九月五日に開幕し、観覧者数五万二〇四六六、関連講演会、シンポジウム（七件）などの参加者数一三〇〇人と大盛況のなか一月八日に閉会した。観覧者からは、多くの模写や粉本と比較してみることができ波響筆の「夷酋列像」がいかに繊細な技法で描かれ、人物の姿や構図など、完成された絵であることや、描かれた蝦夷錦、ロシアの外套などの衣装やアイヌ民族の道具、毛皮、朝鮮毛綴、ジャワ更紗など、蝦夷地で交易や交流といった世界的な動きが存在していたことに驚く方が多かった。

この後、歴博では特集展示として（二〇一五年三月五日〜二〇一六年二月七日）、民博では特別展示として（二〇一六年二月五日〜五月二〇日）、順に開催する。この展示会をつうじアイヌ文化、その歴史などにあらたな発見や興味、関心をもっていただければ幸いである。

の民」を鎮圧し、極刑を科すという気持ちではなかったのではないかと思います。「夷酋列像」のもっている魅力は、波響のアイヌに対する尊敬すら感じさせる描き方にあると思います。そういう心情が絵の細部ににじみ出ている部分がある気がします。

日高 不思議なのは、波響はこれ以後アイヌの絵を描いていないんですよ。

大塚 それは波響の大きな謎です。彼のアイヌに対する感情と相反する描写をすることについて忸怩たるものがあつたのかもしれない。

日高 描き終わった後に、描く前にはなかった、何か悶々とするものがあつたのかもしれないですね。アイヌの絵を描かなくなったことも、何があつたのか、ドラマを感じさせます。

未来へ向かって

大塚 「夷酋列像」からは、まだまだこの先いろいろなことが読み取れると思っています。それらをどう解釈してどう位置づければいいのか、これだという決め手はなかなか見つかりません。

日高 先生の報告書の出版で、研究がより進展するひとつのきっかけになるのではないですか。

大塚 共同研究で得た知見を共通の財産としながら、謎の解明に活かしてくれればと思います。

このたび北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターが統合され、北海道博物館が開館しました。今回の「夷酋列像」展が、北海道はもとより日本列島に生きる人たちがアイヌの人たちとともに手を携えて生きていきましようという、新しい共生社会の構築に向けたメッセージのひとつとなることを期待します。

「夷酋列像」

デジタルコンテンツの制作

内田 順子 国立歴史民俗博物館准教授

「夷酋列像」の実物を見て、みなさんは最初にどんなことを感じるだろうか。原紙の大きさは、縦四〇センチ、横三〇センチ。「思っていたより小さい」と感じるかたも少なくないようである。もっと近くで見られたらいいのに。拡大して細部を観察できたらいいのに。博物館のデジタルコンテンツは、来館者のそうしたニーズに応えるためのツールのひとつである。

「夷酋列像」展において制作したデジタルコンテンツは、「夷酋列像」に描かれたアイヌの有力者たちを、いくつかのテーマで、その部分に着目し、



自在閲覧システム「全体説明」画面



自在閲覧システム「全体説明」の「ツキノエ」の拡大画面

比較観察できるようにすることを目的として制作したものである。

「イコリカヤニ」図を欠くブザンソン美術考古博物館所蔵の「夷酋列像」を素材として使用しているため、コンテンツに登場するのは一人。テーマについては、北海道博物館学芸員の春木晶子さんからご提案いただき、それに基づいてクロージアアップする箇所を選び、テーマをまとめていった。テーマは、①一枚ごとの全体説明、②金泥文字、③顔、④蝦夷錦・中国の衣服、⑤ロシアの衣服、⑥アイヌ文様の衣服、⑦道具、⑧毛皮と動物、⑨装身具、⑩履物、から成っている。

今回制作したデジタルコンテンツには、先述のテーマを自分で選択して見る「自在閲覧システム」と、四五枚の画面を二枚二〇秒で表示する「自動デモモード」の二種類がある。どちらを展示に用いるかは、混雑状況等により、博物館スタッフが判断し、PC起動時に選択できるようにした。

自在閲覧システムでは、「もくじ」画面から見たいテーマを選び、「夷酋列像」の高精細画像を自由に眺めることができる。画面は、表示を二倍に拡大する「大きく」ボタン、二分の一に縮小する「小さく」ボタン、倍率や表示位置を起動時の画面に戻す「リセット」ボタン、もくじに戻る「もくじ」ボタンなどで操作できるほか、指で絵の同じ場所をトントン二回叩くと、その場所を中心にして表示が二倍に拡大する仕組みや、指を絵に触れたまま動かすと、表示も指の動きに合わせて動く仕組みもある。解説の文章は、画面に表示される絵に応じて変わる。

テーマによって、選択箇所が多いものもあれば、数が限られているものもある。例えば、もくじで「蝦夷錦・中国の衣服」を選べると、全員について選択箇所が表示されるが、「アイヌ文様の衣服」では、三人についてしか選択箇所が表示されない。松前藩が、あるいは、蠣崎波響が、どのような衣装を着せてこれらの人びとを描いたかったのか、これらの画面からも考えることができるだろう。

（コンテンツ制作メンバー）解説文：春木晶子、システム制作：画面デザイン：鈴木卓治・山本紀久子、企画・制作統括：内田順子

アイヌの衣服から見えてきたこと

吉本 忍 民博名誉教授



釧路市立博物館所蔵の木綿衣(この木綿衣は、「夷酋列像」展で展示される)

アイヌ民族資料は、国内外の博物館や資料館などに数多く収蔵されている。しかし、それらの大半は、原収集地や使用地、収集年代や使用年代などがあきらかでない。したがって、一九世紀前半以前のアイヌ文化には、不明なことが多く、「夷酋列像」をはじめとする絵画史料や文献史料によって、おおよそのようすが知られてきたにすぎない。

そうしたなかで、原収集地や使用地、収集年代や使用年代がほぼあきらかになっている古いアイヌの衣服として、ロシアのサンクトペテルブルクにあるロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館が所蔵する木綿衣二点（晴れ着として使われてきた衣服で、アイヌ語名称は「ルウンペ」、資料番号82017/2、以下ロシア資料）がある。これらは、前記の博物館が火災に見まれた一七四七年よりも前に収蔵されていたという。その情報に間違いがなければ二点の木綿衣は、一八世紀初頭に千島列島北部で収集された可能性が高く、アイヌの最古の衣服として位置づけられる。

一昨年からはまっている科研「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（代表・佐々木史郎）の研究プロジェクトでは、わたしも研究分担者として織物や織りに係るさまざまな民族資料の調査・研究を遂行中である。そして、その一環として、前記のロシア資料と、北海道立アイヌ総合センター元学芸員の津田命子さんによって類似性が指摘されてきた釧路市立博物館



紋縷子(もんりんず)に摺り四田(すりひった)が染められた切り伏せ刺繍



自在閲覧システムの操作風景



ロシア資料の刀懸け帯の飾り布として使われている「辻が花」の断片

館が所蔵する木綿衣（収集年一八九五年、収集地―釧路市、製作地―虻田町、以下釧路資料）との比較研究もおこなっている。この比較研究は今も続いているが、これまでにロシア資料二点と釧路資料とのあいだには、さまざまな共通性や類似性を確認している。たとえば、襦のある独特の木綿衣であることや、藍で染められた木綿地にほどこされた切り伏せ刺繍の模様、および切り伏せ刺繍の布素材（小袖をリサイクルしたと見られる紋縷子、平絹、紅絹などの絹織物の断片）などが共通している。そうしたことから見えてきたことは、これらは北海道の噴火湾地方の同じコタン（アイヌ社会を構成する最小の居住単位）に住むアイヌの人たちが、同じ時期につくった可能性が高いということである。また、いずれの切り伏せ刺繍も長年の使用によって生じたと思われる布地の劣化が著しい。したがって、一八世紀初頭の収集と想定されるロシア資料の製作時期は、一六世紀後半から一七世紀初頭あたりまで遡りうる。さらに、その可能性を補強するものとしては、ロシア資料の木綿衣とともに千島列島北部で収集されたと見られるアイヌの刀懸け帯の飾り布がある。これは室町時代末期から江戸時代初期のあいだにつくられ、日本染織史上超一級の名品とされる「辻が花」の断片で、その存在もまた、今回の科研プロジェクトの調査であきらかに

なった。

こうしたアイヌの衣服からの発見は、北海道アイヌが積極的に対外活動を展開していたことのあらたな証しといえる。そして、その発見は闇のなかに埋もれていたアイヌ文化史の一六世紀後半から一七世紀の時期に、一条の光を幾多の方向に向けて照射し始めている。



アイルランド

家庭内の聖堂で使われていたとされる、赤い色のランプ。1830年代に製作されたもので、祭壇の脇に灯火をとすための儀礼用のものと思われる。

H16 x W7.7 x D7.4
H0121740

ポルトガル

カーバイドランプ。固形のカルシウムカーバイドと水を反応させ、発生したアセチレンガスに火をつける。燃料の扱いが容易なため、携帯用の照明として発達した。なお集光のための反射板は失われているようである。

H34 x W7.4 x D9.4
H0150959



モロッコ

モロッコ都市部の富裕な家庭で用いられていたとされる、黄銅製のろうそく立て(燭台)。このような7つの枝の燭台はメノラーとよばれ、ユダヤ教の儀礼に用いられる。

H33 x W21 x D13
H0168906



マダガスカル

トマト缶から作られた灯油ランプ。トマト缶は砂糖などを量り売りする際の計量器としても用いられるが、加工もしやすいため、このランプのようにさまざまな製品に使われている。風よけのガラスはなく安価。

H8.0 x W7.2 x D5.7
H0267565

イラン

屋内照明用のランタン。真鍮にほどこされた造形と透かし彫りが美しい。西アジアの家屋は熱暑を避けるために窓や入り口などの採光部が小さく、そのためさまざまな屋内照明具が発達した。

H139 x W49 x D48
H0007742



エジプト

着飾った女性の姿をかたどった装飾用のランプ。このような人形はエジプトではアルーサ(花嫁人形)とよばれ、預言者生誕祭に女の子に贈られる砂糖菓子にも見ることができる。

H53 x W24 x D18
H0109502

ネパール

ボン教の儀式で用いられる儀礼用具のひとつ。カップに溶かしたバターと芯を入れて、灯火をとす。

H11 x W8.5 x D8.5
H0269431



日本(長野県)

行灯(あんどん)。アチックミュージアムのメンバーによって集められた甲信越地方の民具のひとつ。持ち手が付き、見廻りなど屋外で使われていたものと思われる。行灯は電灯が普及し始めた後にも、寝室の照明などに用いられた。

H48 x W17 x D17
H0018471



ボリビア

明け方、まだ暗いとき、ラテックス採取人がゴムノキの幹に切り目を入れるときに照明として用いる携帯用ランプ。両手で作業をおこなうため、頭にかぶるようにできている。燃料はケロシン。

H29 x W18 x D19
H0213381

集めてみました世界の



まるかわ ゆうぞう
丸川 雄三

民博 先端人類科学研究部

闇を照らす「あかり」は、古代より人びとの暮らしに欠かせないものである。人間は長いあいだ蝋や油などに火をともし、その灯火を照明や儀礼に用いてきた。ゆらめく炎が私たちにもたらす安心感は、時を超えて心に刻まれ続ける人類共通の記憶のひとつと言えるだろう。

今回あつめたみんなの標本資料も、いずれも火を光源とするものである。照明としてのあかりは、今はLEDなどの電気照明に替わられつつあるが、あかりを必要とする場面や用途は、昔と今とでそれほどの違いはないようである。

※寸法単位はセンチメートルです。



インドネシア

影絵芝居(ワヤン・クリット)の上演用のランプ。やしの油のゆらめく炎が白い布に人形の影をつくり、神々や道化の物語を人びとに見せてくれる。つり手にはナーガ(蛇神)の装飾がほどこされている。

H37 x W30 x D27
H0006806

特別展
「東西列像
蝦夷地イメージをめぐる人物・世界」
 「東西列像」は、アイヌの指導者12人を描いた肖像画です。

本展示では、「東西列像」を近世絵画史のなかでとらえるとともに、18世紀におけるアイヌの事情やアイヌ文化の背景に隠された中国やロシアを含めた北東アジアと蝦夷地の知られざる歴史・文化を明らかにします。

会期 2月25日(木)～5月10日(火)
 会場 特別展示館

◆関連イベント
「東南アジアの仮面と人形」
 ラオス、カンボジア、マレーシア、インドネシア(ジャワ、バリ)などの芸能を取り上げ、パフォーマンスや映像を交えたお話とワークショップをシリーズで開催します。

① 2月13日(土) ② 2月14日(日)
 ③ 2月20日(土) ④ 2月21日(日)
 ⑤ 2月27日(土) ⑥ 2月28日(日)
 時間 全日程11時～13時(開場10時30分)
 会場 本館第5セミナー室

◆関連イベント
「波伝谷に生きる人びと」
 我妻監督と波伝谷の方々をお招きし、映画上映を通して皆さんと被災地の将来について考えます。

日時 2月6日(土) 13時～16時15分(開場12時30分)
 会場 本館講堂(定員450名)
 ※申込不要、要展示観覧券、11時から本館2階観覧券売場にて整理券を配布

◆関連イベント
「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて」
 オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」

日時 2月11日(木・祝)、2月12日(金) 各日 10時～18時
 会場 本館第4セミナー室(定員60名)
 使用言語 英語(日本語逐次通訳)
 ※事前申込、参加無料

国際シンポジウム
「無形文化遺産の継承におけるオーセンティックな変更・変容」
 3月11日(金)～13日(日)
 会場 本館第4セミナー室(定員60名)
 使用言語 英語(日本語同時通訳)
 ※事前申込、参加無料

「点字体験ワークショップ」
 日時 2月13日(土) 12時～15時30分
 会場 本館エントランスホール
 ※申込不要、参加無料

「ワールドアートの最前線—アイヌの文様とエチオピアの響き」
 アート(芸術)概念自体を問い直す、ワールドアートの動向について、国、地域や製作者の状況などの違いに注目して、紹介していきます。

日時 3月25日(金) 18時30分～20時45分
 会場 オールホール(大阪市北区梅田)
 定員 480名
 主催 国立民族学博物館、毎日新聞社
 ※参加無料、事前申込、要参加証、手話通訳あり
 お申し込み・お問い合わせ 本館 研究協力係
 電話 06-6877-8209

「地球探究紀行」
 みんなくが研究者が驚きと感動をお届けします。世界の文化の、奥深くへ一緒にどうぞ。

時間 13時～14時30分
 会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
 ※事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円(定員各回50名)
 共催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9 特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団

「アジア太平洋諸国の災害復興—人道支援・集落移転・防災と文化」 明石書店 4,300円(税抜)
 2011年の東日本大震災も含め、近年のアジア太平洋諸国では、巨大地震、津波、サイクロンなどの自然災害が頻発している。各地域の専門家が災害や地域の違いを越えて共通する災害復興の課題に取り組んでいる。

「環北太平洋地域の先住民文化」 SER No.132 国立民族学博物館 900円(税抜)
 環北太平洋地域の先住民文化についての研究史概論と日本人研究者による文化人類学、考古学、言語学などの諸研究を所収。同地域の研究を発展させるためには比較研究と学際研究、先住民社会との協働研究が必要と主張している。

「カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題—国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをとおして」 SER No.131 国立民族学博物館 1,100円(税抜)
 版画の調査を足掛かりに、芸術の展開がカナダ先住民社会に与えた影響を探った。芸術をはじめとする文化の復興は、先住民の権利回復を後押しし、彼らの経済を支えるとともに、アイデンティティの象徴ともなっている。

「アジヤ太平洋諸国の災害復興—人道支援・集落移転・防災と文化」 林勲男編
 2011年の東日本大震災も含め、近年のアジア太平洋諸国では、巨大地震、津波、サイクロンなどの自然災害が頻発している。各地域の専門家が災害や地域の違いを越えて共通する災害復興の課題に取り組んでいる。

2月3日(水) パキスタンの山奥でこぼれを調べる 講師 吉岡乾(本館助教)
 2月24日(水) 南太平洋のサンゴ島を掘る—女性考古学者の謎解き 講師 印東道子(本館教授)
 お申し込み・お問い合わせ先 ウェーブ産経カレッジシアター係 06-66333-9087

●中央・北アジア、アイヌの文化展示リニューアルのお知らせ
 展示リニューアル工事のため、中央・北アジア、アイヌの文化展示場を3月16日(水)まで閉鎖しています。

●展示場閉鎖のお知らせ
 設備工事のため、1月から3月に各展示場を次のとおり閉鎖します。
 オセアニア 1月27日(水)～2月3日(水)
 西アジア・音楽・言語 2月3日(水)～2月10日(水)
 アフリカ 2月10日(水)～2月17日(水)
 朝鮮半島の文化・中国地域の文化 2月17日(水)～2月24日(水)
 南アジア 2月24日(水)～3月2日(水)
 日本の文化 3月2日(水)～3月9日(水)
 東南アジア 3月9日(水)～3月16日(水)

●入館料割引の案内
 1月21日(木)～2月23日(火)の期間は団体料金相当額(一般350円、高校・大学生200円、小・中学生90円)で観覧いただけます。
●みんなくシャトルバスのご案内
 大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直通送迎バスを期間限定で運行します。

運行日 2月25日(木)～5月10日(火)
 1日11往復、所要時間10分、無料
 運休日 休館日、2月27日(土)、3月5日(土)、6日(日)、13日(日)

友の会講演会(大阪)
 会場 本館第5セミナー室(定員96名)
 ※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
 第451回 2月6日(土) 14時～16時 世界の食文化を学ぶ⑥
博物館で食文化を考える
 みんなく展示場をフィールドに見立てて 講師 池谷和信(本館教授)
 地球上にはさまざまな飲食文化がみられます。米や小麦、トウモロコシや芋類などの主食、肉や魚や野菜から得る副食、茶や酒、乳など、それらの組み合わせには地域的な多様性がみられます。「一方で「調理をする」「食糧を分かちあふ」といった行為には、人類文化としての共通性を見出すことができます。本講演会では、展示場をフィールドに見立て、各地の食の在り方をさぐるとともに、食文化研究の動向にも触れながら、食の過去、現在、未来について考えます。

●講義(14時～15時10分) 終了後、展示場の見学会をおこないます。
 第452回 3月5日(土) 14時～16時
祖先とともに住まう家
インドネシア、スンバ島で家屋を建てる
 講師 佐藤浩司(本館准教授)
 乾燥した自然環境—決して生活条件のよくないスンバ島を有名にしているのは、豊かな装飾を施した織物と巨石文化、それに棟の高く突き出た独特の家屋の並び集落景観です。巨大な屋根の高さは、地域によって10メートルを超えることもあります。ところが、年に二度の農耕儀礼の時にしか、人間は屋根裏にのぼることが許されているのです。スンバ島の屋根にはどんな秘密がかくされているのでしょうか。建築構造や空間構成など、家屋にまつわる慣習とあわせてお話しします。

●講義(14時～15時10分) 終了後の懇談会では、映像資料「マラブの家」を鑑賞します。

味の根っこ



ポーランドの伝統料理

ビゴス

マジェッツ アグネシカ 民博 外来研究員



盛り付けたビゴス。トッピングにはパプリカ

ポーランド料理といえばビゴス。ビゴスはおもに、冬に食べられる名物料理である。冬のポーランドは厳しい寒さになるから、温かい料理や高カロリーの料理を食べたくなる。そこでビゴスの出番である。

どんな料理？

このビゴスとは、具体的にいえば、キャベツと肉類、干しキノコ、干しブラム、そして玉ねぎと調味料を煮込んだ料理である。元々は他の料理で使った材料の余りもので作った料理といわれている。そのため、むかしはあまりよくないイメージがあり、ポーランド語の少し悪い意味の慣用句として使われていることが多い。例えば、「アレ・ビゴス！」という、普通は「なんて立派なビゴスだ！」を意味するが、慣用句として使うと、「失敗した！」という意味になる。同じように「アレ・ナロビウム・ビゴス！（私はビゴスをたくさん作った）」の慣用句としての意味は「迷惑をかけた」となる。

このように、ビゴスということばがポーランド語の慣用句に入っているということは、ビゴスがむかしながらのポーランドの料理だったと思われる証拠である。しかし、隣の白ロシア、リトアニアなどの国々でも食べられている。かつてヨーロッパでの戦乱のさなか、人びとはこれらの国々を逃げまどい、それぞれの料理と習慣が混ざっていったのである。

このために、誰が最初に作ったか、どこで作渡すように頼まれた。そこで、わたしは代表的な伝統料理のビゴスのレシピを渡しておいた。

当日、会場に来てみると、ビゴスの美味しうなおいがるでしななかった。ひょっとして、今はまだ冷やしているの、ビゴスのおいがないのかと思った。そして、交流会が始まってからしばらくして、部屋の奥から、何かを包丁で刻む音が聞こえてきた。そのときは、他の料理も出すのかと思った。しかし、肉とキャベツを煮込むにおいがしてきたので、「まさか！」と思った。スタッフの勘違いか、わたしの説明不足のせいで、本来なら三日間煮込まなければならぬビゴスを当日作っていたのである。これから、みんなでこの「ビゴスみたいな料理」を食べるのである。そのことを考えると、複雑な気持ちになった。美味しいビゴスを食べてもらおうと思っていたからである。こんなことなら、もっと簡単なポーランド料理のレシピを渡



ビゴスのスパイスミックス (材料:胡椒、マジョラムなど)



瓶に入れて、保存中のビゴス

られていたか、なぜ「ビゴス」という名前になったのか、諸説が色々あるが、本当のところはわからなくなっている。しかし、慣用句以外にも、ビゴスはポーランドの伝統的な料理として、むかしからさまざまなポーランドの料理書や文学作品に登場している。

いろいろな味の「ビゴス」

このビゴスという料理にはいろいろな種類があり、それぞれ味と見た目が異なる。例えば、伝統的ポーランド式ビゴス、狩人式ビゴス、悪党のビゴスなどがあり、各家庭において材料や味付け、更に、これらの材料の切り方や材料の割合が多少、異なったりする。これにより、多彩な味のバリエーションが生まれるのである。

しておけばよかったと思った。出てきた「ビゴスみたいな料理」を見て、わたしは「アレ・ビゴス！」としか思えなかった。

伝統的ポーランド式ビゴス (10 人分)

キャベツ	300g
酢キャベツ(ザワークラウト)	500g
仔牛肉	200g
豚肉	200g
牛か豚のベーコン	100g
ソーセージ	150g
玉ねぎ	100~300g
小麦粉	20g
赤ワイン(辛口)	50ml
トマトソース	40g
干したポルチニ茸	5~10個
干したブラム	20g
塩、砂糖、マジョラム	適量

- キャベツをせん切りにする。酢キャベツの水気を切る。ポルチニ茸を洗い、柔らかくなるまで水につけた後、みじん切りにする。ブラムを洗い種をとって、柔らかくなるまで水につけた後、みじん切りにする。すべてを鍋に入れて軽く混ぜ、塩を少々入れた熱湯を入れ、ふたをして一度沸騰させる。この後、弱火にし、50分煮る。
- ソーセージの皮を取り、輪切りにして更に半月状に切る。他の肉類と玉ねぎは洗った後、一口大の大きさに切る。少し油をひいたフライパンを熱し、ベーコンの油が溶けるまで軽く炒める。そこにソーセージと他の肉類を足して軽く炒め、更に、玉ねぎを足して、軽く炒める。フライパンの底から5ミリ位の深さになるまで水を入れ、ふたをして弱火で5~10分ほど蒸し焼きにする。
- 少し油をひいたフライパンに小麦粉を入れ、軽く色がつくまで炒める。
- ②と③を①の鍋に入れる。キャベツとよく混ぜて、ワインと調味料を加える。
- 6~8時間位弱火で煮込み、様子を見ながら少々の水を加え、軽く混ぜる。鍋を火から下し、常温になるまで待った後、鍋ごと冷蔵庫などで一晩冷やす。このサイクルを3日ほど繰り返す。

*食べるときには温めて、好みによりパプリカ、パセリ、レタスなどをトッピングしてパンと一緒に食べる。



きつね色になった、調理中のビゴス

見出された多様な価値

——ミクロネシアにおける世界遺産申請の過程から

かわの まさはる
河野 正治 筑波大学大学院博士後期課程

世界遺産登録に対する期待は、どの国（地域）でも大きい。しかし、世界遺産の制度が知られている国とそうでない国とは、反応が少し異なっているようだ。



竜宮城ならぬナン・マドール

ミクロネシアのボーンペイ島で調査をしていたある日のこと、島民の男性と話をしていると、彼は得意げにこんなことを言い始めた。「浦島太郎の話なら聞いたことがあるぞ。浦島太郎はナン・マドールにやって来たんだろ」。

日本に統治された戦前の一時代（一九一四〜四五年）の名残だろうか、それとも島に伝わる海底都市伝説の変形だろうか。ともかく竜宮城ならぬナン・マドールは、ボーンペイ島にある。海上都市さながらの景観は、外部者から「太平洋のベニス」と形容され、島民に限らず、海外からの関心も広く引き寄せている。大小約九五の人工島が海上に浮かびひとつの壮麗な空間をつくる様子は、古代王朝独特の強さと美しさを伝える。

太平洋のベニス

人工島はそれぞれに固有の名前や伝承をもち、各島の間には水路が張り巡らされている。これらの人工島にはおもに玄武岩で築かれた幾つもの巨石建造物



みごとに玄武岩の石積み。長さ五メートルにおよぶものもある（撮影・関根久雄）

がある。王の墓や儀礼場として利用されていたようだが、建造時に大量の巨大な岩がどのように運搬されたのかは、今でも謎のままである。

ナン・マドールは、太平洋で広く見られる巨石文化のなかでもっとも大規模で壮麗な遺跡のひとつであり、いつ世界遺産になっても不思議ではないと専門家や政府関係者のあいだで言われてきた。

遺跡をめぐる多様な価値づけ

数年前、ミクロネシア政府はナン・マドールの世界遺産登録に向けた準備に舵を切った。現在は申請中であり、近い将来に登録される見通しだという。申請の過程では、伝承に根ざした巨大建造物というだけに留まらない多様な価値が見出された。

まず、観光資源としての期待が膨らんだ。米国からミクロネシア連邦への財政援助期間（一九八六年〜）が満了予定の二〇二三年を控え、政府は経済と財政の活路を観光に求めており、世界遺産はひとつの希望である。さらに、世界遺産化に向けて保存意識が高まり、気候

変動や観光客への対応が見直されている。他方、ナン・マドール近辺で暮らす住民には、遺跡や土地の権利をめぐる不安も生まれた。遺跡を保護する伝統首长や地元NGOは、遺物の持ち去りなどを警戒し、外国人による発掘調査を時に拒絶させた。遺跡の入場料として支払われる三米ドルを収入源とする地権者は、世界遺産登録によって徴収の権利が奪われるのを恐れた。世界遺産の認定後は、遺跡を管轄する伝統首长の権威が高まる

一方で、島内の他地域の伝統首长とのあいだに溝が生まれることも予想できる。世界遺産の申請は、ナン・マドールの遺跡としての価値を高めただけでなく、島民や政府があらたに遺跡の価値を見出すきっかけとなった。だが、世界遺産化の動きに自覚的な島民はまだまだ少ない。今後、世界遺産をめぐる彼らがさまざまな紡いでいく価値は一体どんな軌跡を辿るのか。興味深くも慎重に見守るうではないか。



ナン・マドールの平面略図



井桁状に柱状玄武岩を八メートルにも積み上げた首長墓の周壁（撮影・関根久雄）



海上都市のナン・マドールは、海路からの観光も楽しめる（撮影・片岡修）



島を一周する道路からはナン・マドールの看板が見える（撮影・関根久雄）

フィリピンの街で奏でる山村の音楽

—トラヤン・マジョカヨン・アンサンブル

他人に何かを伝えるとき、自分が受け継いだものがそのまま伝わるわけではない。個人の体験や思いなどにより、再び編まれたものが他人に受け渡されるのである。



ガンサの練習風景。左端がホセ（撮影・寺田吉孝）

踊る鷹の楽団

トラヤン・マジョカヨン・アンサンブル（以下アンサンブル）は、フィリピン北部カリリガ州の州都タブクを拠点とする、ゴング（ガンサ）や竹楽器類を演奏するグループである。リーダーのホセ・パンシウ（七〇）はポーンイスカウト協会を二〇年前に退職後、焼き畑と水田耕作のかたわら、地域の自治活動にもかかわっている。他のメンバーは、妹弟たち、そしてその子どもたちである。「トラヤン」は、鷹を意味し、「マジョカヨン」は、パンシウ家の属する部族の名前である。カリリガ州にはたくさんの方住民のグループが住んでいる。そのなかでマジョカヨンの人びとは、ガンサに合わせて踊る鷹の動きを模した快活なトラヤンの踊りで知られている。

アンサンブルは、時折、要請があると、演奏に出向く。二〇〇〇年代に三回、台湾によばれた。他にも、先住民の集まりや、音楽学の国際学会があったときなどに、マニラで演奏した。しかし、地元では、アンサンブルの出番はじつはあまりない。結婚式などの際のガンサに合わせた踊りでは、参列者たちが次々と自発的に演奏に加わってし

まうからである。竹楽器の演奏の機会も少ないが、外からの要請があれば、幾ばくかの練習もするし、壊れた楽器を修理したり作り直したりもする。ホセが演奏と楽器作りの得意技を子どもたち、甥姪たちに伝えるチャンスでもある。

継承の現場で

フィリピン北部の山村に育ったホセは、北部の都市バギオの大学を卒業し、しばらく働いた後、父親が移住したカリリガ州の街タブクに自分も移り、ここで結婚し、七人の子どもに恵まれた。大学時代は、山出身の学生たちのグループ、ピバック（PIBAK）に所属し、そこで、ガンサや他の音楽をメンバーと一緒に演奏した。ここで、他の地域の山地民が、ときには似たような、ときには異



自宅で、自作の楽器に囲まれて（撮影・寺田吉孝）

なった音楽を知り、自分も他の地域の音楽を真似してみたりもした。また大学の博物館でアルバイトをして、山地民の楽器や民芸品などに名前をつける作業をした。一九七八年には、フィリピンの著名な作曲家ルクレシア・カシラッグらとともに東京に招待され、竹琴、竹口琴、竹笛などを披露した。このような経験が、彼の知的好奇心を刺激し、自分の文化の誇りの基盤になっているようである。

二〇〇七年からは、弟らとともに、市内の中学校に設置された、政府の伝統文化継承プログラムの講師も務める。今日、継承が難しくなってきた竹笛や叙事詩ウラリムなどを教えるが、先生に指示されるままに出て来るだけの子どもたちに教えても、なかなか効果が出不ない。また、アンサンブルは、昨年、タブク市のフェスティバルのコンテストに参加したが、三位だった。台湾でしたように、さまざまな楽器のさまざまな奏法を披露したのだが、五十以上のガンサを同時に奏するストリートダンス風の大編成のチームが優勝したのには納得がいかない。マジョカヨンの叙事詩ソググナの歌詞を書き留めたときは、州の知識人から、スペルが違う、と直された。押韻のため、単語の発音を一部変えることはよくある。正しいスペルで書く、韻がなくなってしまうため、詩の生命が失われる気がする。地元での継承は、必ずしも順風満帆ではない。

昨年楽器や竹細工の製品を売る小さな店



店のなかで、妹イサベルと、タンビを披露（楽器を棒で交互に叩く）

を始めた。ホセの夢は、子どもたちが竹楽器の制作や竹細工のスキルを身につけること。三女フェリサは、マニラの研究者の支援を受けて、民族音楽学を学ぶ。今は、実家の手伝いをしながら、父ホセのマジョカヨン音楽・文化の知識を整理して修士論文にまとめている。

アンサンブルは、山村の先住民の音楽を、移住先の街で、外からの程よい刺激を受けながら、次の世代に引き継いでいる。貴重なケースである。筆者は、ホセの誠実な人柄に魅かれ、またアンサンブルの地道な活動を評価している。研究者として何らかの支援ができればと思うが、何もしないほうがいい様な気がする。適度な距離を保ちながら陰から応援していきたい。

ファッションやアートの世界だけでなく、学問にも流行り廃りはある。ある時代に二世を風靡し、もてはやされた思想やものの見方も、時間が経つとすっかり時代遅れになり、否定されたり、忘れ去られたりする。だがときに、時代を超えてあらたなかたちでリバイバルすることもあるのは、まさにファッションの世界と同じである。

一九世紀末から二〇世紀にかけて世界中で流行した優生学は、まさにそんな学問のひとつだといえるだろう。優生学(ユージェニクス)とは、イギリスのフランシス・ゴルトンが一八八三年にギリシャ語から作った造語である。『種の起源』で生物の自然淘汰について論じたチャールズ・ダーウインの従兄であったゴルトンは、人間の進歩に関心をもち、人間をより優れた状態へと改良するための科学として優生学を定義した。ダーウインが唱えた、環境適応による種の特性の自然選択という考えには、当初は「進化」という優劣の概念はなかったとされる。だが、それが生物学を超えて、人間の諸社会も西欧を頂点とする進化的途上に位置づけられるとする社会進化論と結びつくと、より環境に適した人間の増加を積極的に推奨するかわりに、適していない人間を淘汰することで、社会の進化を加速させることが目指されたのである。

この思想は、多様な民族的出自をもつ移民を受け入れるアメリカ合衆国において、政策として実現することとなった。それが、社会的不適合者とみなされたさまざまな集団——そこには、貧



再び注目!

人間学の
キーワード

優生学

Eugenics

まつお みずほ 民博 先端人類科学研究部
松尾 瑞穂



困者から犯罪者、同性愛者、知的障がい者、てんかん患者など雑多な属性の人が含まれていた——に対する強制的な断種や隔離政策であった。さらにそれは、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによるユダヤ人の迫害と虐殺という悲劇へと行きついでしまった。

いまでは、優生学が目指した人間の選別は、許されざるところでもない思想だと誰もが思うだろう。人間は平等であり、生命は等しく尊いものだというのは、現実はどうであれ、少なくともわたしたちが教えられ、信じてきた倫理である。だが、優生学的思想は、この「現実はどうであれ」というただし書きのなかに、いまでも存続している。人口抑制と開発がセットとなつて途上国で繰り広げられてきた産児制限、優生保護という名のもとでおこなわれてきた人工妊娠中絶、尊厳死をめぐる問題、胎児の染色体から障がいの有無を調べる出生前診断、遺伝性疾患の伝達を防ぐ着床前診断、遺伝病治療、そして一般にも広がる遺伝子検査……。

民族や人種のような集団を対象としたかつての優生学とはちがいが、遺伝学の飛躍的な進展にともない、リバイバルした今日の優生学は、医療の現場で、個々人の選択の問題として立ちあらわれている。科学としては否定された今日でも、優生学はかたちを変えて存続し、わたしたちに重要な問題を投げかけている。科学と社会、そして人間とのかかわりは、人間学としての人類学が今後取り組むべき課題だといえるだろう。

編集後記

「夷酋列像」は、いまだに多くの謎に包まれた絵のようだ。なぜ描かれたのか？ どのような制作過程だったのか？ いつ、どうやって原本がフランスに渡ったのか？ 絵の構図や内容自体にも『ダ・ヴィンチ・コード』なみに、さまざまな暗号が秘められているようで、好奇心がすぐられる。

当時の和人とアイヌの関係を知らずにはいられないのみならず、より大きな世界史の文脈から鳥瞰^{ちようかん}しても興味深い資料である。クナシリ・メナシの戦いがあった1789年といえば、ちょうどフランス革命勃発の年である。日本でもそれから一世紀もたたない間に明治維新となっている。封建社会から市民社会へと時代が大きく変わるなかでヨーロッパでは、18世紀末から19世紀前半のロマン主義思想のもと、いわゆる「高貴なる野蛮人」(the noble savage) のイメージが、絵画や文学の類型のひとつとなってゆく。「夷酋列像」も当時のアイヌの人びとの実態をあらわすというよりは、異質性を誇張しつつ、誇り高さ人びととして描いたものだという。18-19世紀北米の歴史絵画におけるアメリカン・インディアンの描写と比較してみてもおもしろいのではないかな。特別展で実物をじっくり見ることが楽しみである。(山中由里子)

- 表紙：国立民族学博物館所蔵「夷酋列像図」より、イコトイ、ツキノエ、シヨッコ。
 図書資料番号 F104007177、F104011165

次号の予告

特集

アートの境界

月刊みんぱく 2016年2月号

第40巻第2号通巻第461号 2016年2月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
 編集委員 山中由里子(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
 丹羽典生 丸川雄三 南真木人 吉岡乾

デザイン 宮谷一孝 長岡綾子
 制作・協力 一般財団法人千里文化財団
 印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
 お願いします。
 *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

もっと、「みんなぱく」らしく。

「みんなぱくクッキー」リニューアル

ミュージアム・ショップで2012年より販売中の「みんなぱくクッキー」が、「もっとみんなぱくらしく！」という声にお応えして、仮面のかたちになって新登場しました。

仮面のデザインは2種類。「イメージの力」展でおなじみのキフェベ（コンゴ民主共和国）と、祭礼用仮面（ルーマニア）が、かわいくアレンジされています。

クッキーの製造は、ひきつづき大阪・吹田市の「ぶくぶくワールド」さんです。無添加で身体に安心・安全な材料・製法で、障害をもつ人たちとともに、こだわりのクッキーを作っています。パッケージのデザインは、武庫川女子大学生生活環境学部情報メディア学科の学生さんたちのご協力によるものです。

「みんなぱくクッキー」は、ミルクとジンジャーの2種類のクッキーが一箱に収められています。ミュージアム・ショップの新しい「顔」を、ぜひお買い求めください。



クッキーの元になったコンゴ民主共和国のキフェベ（左）と、ルーマニアの祭礼用仮面（右）。実物はなかなかの迫力です。祭礼用仮面は、ヨーロッパ展示で展示中です

みんなぱくクッキー

ミルク、ジンジャー
各40グラム1セット

500円（税抜き）

製造者：社会福祉法人 ぶくぶく福祉会
ぶくぶくワールド



お問い合わせ先

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
TEL:06-6876-3112 FAX:06-6878-8421
e-mail shop@senri-f.or.jp 水曜日定休
オンラインショップ [World Wide Bazaar]
<http://www.senri-f.or.jp/shop/>

みんなぱくをもっと楽しみたい人のために———会員制度のご案内

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。電話06-6877-8893（平日9:00～17:00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。